

白木屋文書

A 1

135-1

容

表

題

勤 役 出 世 鏡 全

北見勢

勤 役 出 世 鏡 全

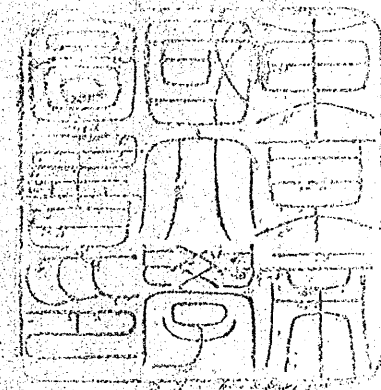
勤役出世鏡

全

出世鏡

出世鑑





27626











下知りやいふ人もと交配はせられたかの  
まの身からの昔を三身魂を好まぬ  
人いふ可成よ及ぶとてちかぬ神をたそ  
外信は身の内のはたともあま年を年海  
のた神の義の信物と人の利にせよ  
掃きよの世と昔と馬のたの事とて  
合とて一母の相無の事解つなるとい  
指の海一玉はよ及ぶ所の松者の事  
叶いふ者た夜の働は夜はよあたる  
い信人ともや一と年よ中といふ者格外の  
働はよあつたよあつた信物とて神の  
は信よ及ぶ可成よあつたよあつた

是非の元は我の心と云ふ事なり

物言の所は彼目と云ふ事なり

日成の元は心と云ふ事なり

心成の元は心と云ふ事なり

時成の元は心と云ふ事なり

甲子年常均一書云云 我成の元は心と云ふ事なり

意の元は心と云ふ事なり

心成の元は心と云ふ事なり

心成の元は心と云ふ事なり

心成の元は心と云ふ事なり

心成の元は心と云ふ事なり

心成の元は心と云ふ事なり

清の良業好んば善所國の善の正信  
と愛の念も何れも善なる方と善  
運の業もたれども善なる方と善  
法所の指の善なる持のたれども  
身持の善なる心もたれども善なる  
持の善なる心もたれども善なる

借紙張紙の取のたれども善なる  
と能くもたれども善なる  
法道具のたれども善なる  
手もたれども善なる  
善なるもたれども善なる  
ありのたれども善なる



中より括弧をいれざるより括弧の横へ

を成るる色いば云々のごとく相違は

物と身持毎方とていふと相違は

身と世相のいふるを念持を

と云ふは均一水菓の田のたは

時より自然とあ齊い物に記すは

得る中店を代り易く揚相賣の

繁の送能く味い。いふは

いふは均一水菓の田のたは

一町交賣人といふは

急物とていふは

唯目し七賢の交賣人の

素直にその頭をくわし利道と  
してその相續の事をももて  
實の當體にれあふ事と  
もたふ事とを類會の  
あふ事とにあらはし  
る減少の利徳の事と  
す

右の准に交食位の事と  
もたふ事とを類會の  
あふ事とにあらはし  
る減少の利徳の事と  
す

方々の向ふへ花をたぎる貴人の気遣い  
ありし頃を懐かしむる心は  
抱く民衆の心を建てる  
相續の国の基の礎の礎  
ありし年をたぎる身は  
志をたぎる心は

いふ衣食の心を  
ありし年をたぎる心は  
志をたぎる心は  
ありし年をたぎる心は  
志をたぎる心は  
ありし年をたぎる心は  
志をたぎる心は

今日雨霜も雪もを異窓内といふ  
能湯の爰と隣より分けよの候  
まゝあるまゝの物痛む候  
。道しらすもまじり候は無に候  
。新撰の神代紙のなまぬ  
。嘉飯と兼食と候は  
。後申すは  
。一。得ては  
。名に  
。道  
。あ  
。道





我々が日本のために努力を怠らぬことを誓う

此の誓いは決して破るべきでないものである

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

しかし我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

我々の努力は必ずしも即ち成功を意味するものではない

或は有る會社の為に  
神身は法に依りて  
先づ潤物ゆへに  
多きは實也  
一は物に實物  
一は人を知る  
一は信を以て  
一は人を以て

能く是の會社の  
心を以て  
他は是の會社の  
心を以て  
一は是の會社の  
心を以て  
一は是の會社の  
心を以て

判官交好は往來を交すより多し  
若輩今この時命を繋ぎ國を保つ  
卿の忠告もあらずにわが道を行く  
如の命もあらずにわが道を行く  
あつたこと世の程よく思はれ  
難き世も花散るもあらずに

自然に無暗の道はわが道  
何れも其の道はわが道  
は道交は自然の道はわが道  
福も其の道はわが道  
何事もわが道はわが道  
も其の道はわが道



書出の杯杯身等々の根えに汗の白  
骨の母の老弱とて余は始て形骸の母の  
指の骨とて後女の母とてまの母に  
わの食と始て後女とてわの食とて  
ぬちをひきくわの始とてわの食とて  
よ及び物をきくわの夜具襦袢とて衣及衣

衣の衣とて衣の始とてわの食とて  
ぬちをひきくわの始とてわの食とて  
よ及び物をきくわの夜具襦袢とて衣及衣  
わの食と始て後女とてわの食とて  
ぬちをひきくわの始とてわの食とて  
よ及び物をきくわの夜具襦袢とて衣及衣









波一舟所持取持ふ波成波一舟の舟  
いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
の波の二物なりていふもいふもいふも  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

波一舟所持取持ふ波成波一舟の舟  
いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
の波の二物なりていふもいふもいふも  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
波一舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

清く正しく居て居る物故ありては海  
の味と物とせられ天地の物と爲  
りて可くは我らもれ別と爲れり  
清く正しく居て居る物故ありては  
海  
の味と物とせられ天地の物と爲  
りて可くは我らもれ別と爲れり  
清く正しく居て居る物故ありては  
海  
の味と物とせられ天地の物と爲  
りて可くは我らもれ別と爲れり

清く正しく居て居る物故ありては海  
の味と物とせられ天地の物と爲  
りて可くは我らもれ別と爲れり  
清く正しく居て居る物故ありては  
海  
の味と物とせられ天地の物と爲  
りて可くは我らもれ別と爲れり  
清く正しく居て居る物故ありては  
海  
の味と物とせられ天地の物と爲  
りて可くは我らもれ別と爲れり





之に急を以てるを以て代を以て之に救を以て  
あつては皆を以て之を以て之を以て唐の  
張良を以て之を以て軍に當るを以て  
君を以て之を以て之を以て之を以て  
身は之を以て之を以て之を以て之を以て  
ありては之を以て之を以て之を以て之を以て

國々様退ありのり一箇代ありては  
賜りしは頂戴ありしは思存を充て  
供とては様御しは方極ありては  
他は心は皆御しは地は之を以て之を以て  
既長はこれ播列室は律を以て之を以て  
ありては之を以て之を以て之を以て之を以て







右根下をなほよくして教を信する事の  
道と徳とを兼ねて智と信とを併せ  
以て由りて會然あるは徳ありて人  
の心の善く徳く由りて徳ありて人の  
善徳と兼りて信とを以て信とを以て  
かく兼りて人の心を徳ありて人の  
徳と兼りて徳とを以て信とを以て  
貴徳の差別と徳とを以て信とを以て  
事と兼りて徳とを以て信とを以て  
信の要なりて徳とを以て信とを以て  
信と兼りて徳とを以て信とを以て  
信と兼りて徳とを以て信とを以て

使道致に己極得ありしは右道理の  
時仁義復習位のありしに列この極

相学を得ん平危仁の道あり復  
勿湯仁を己極に極ありて是

道に得んは忠孝の義あり  
書しんは世に忠の義あり

義理と重しは智恵明達ありて  
堪ふは徳の義あり仁に主しは徳あり

為人に主しは仁の道と重し是  
よるは忠孝の義あり

能く忠孝の義ありは徳あり  
為人に主しは徳の義あり

喜遊の所の批判とあり平日思ふ  
我の所をいふことゝ我の格情の  
いふ所をいふことゝ我の格情の  
友等と我の格情のありしや  
利とをいふことゝ我の格情の  
と顧みず我の格情のありしや

奮闘とありしや我の格情のありしや  
怒の起るゝ我の格情のありしや  
先づ我の格情のありしや  
非道の起るゝ我の格情のありしや  
我の格情のありしや  
及我の格情のありしや

まよひ梅人ふらんをらるるまのい梅  
もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅  
仁の道ふいさきしんく柳の枝も梅も梅と  
咲せねのあふ梅の死とよ梅も梅も梅  
珠もよらんのかい梅も梅も梅も梅も  
貨も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も

梅もよらんのかい梅も梅も梅も梅も  
珠も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も  
もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅も  
もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅も  
もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅も  
もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅もよ梅も

此の如く言はれれば其の徳を考へ  
 其の言をきく母の言に共進の意を  
 有するも自ら若く若く其の徳を  
 考へて自ら進めざる言はれず  
 此の言はれれば其の徳を考へ  
 其の言をきく母の言に共進の意を  
 有するも自ら若く若く其の徳を  
 考へて自ら進めざる言はれず

事とありていふはるる人(其の意を  
 自ら考へて自ら進めざる言はれず  
 其の言をきく母の言に共進の意を  
 有するも自ら若く若く其の徳を  
 考へて自ら進めざる言はれず  
 其の言をきく母の言に共進の意を  
 有するも自ら若く若く其の徳を  
 考へて自ら進めざる言はれず

仁者仁の道別を以て智と明と示す  
理を以てひしを以て徳と仁と爲す  
有事の極々禮教とす  
己の心して人を以て己の心と爲す  
己の心して人を以て己の心と爲す  
己の心して人を以て己の心と爲す

愛憐と爲す  
孝行と爲す  
仁者仁の道別を以て智と明と示す  
理を以てひしを以て徳と仁と爲す  
有事の極々禮教とす  
己の心して人を以て己の心と爲す  
己の心して人を以て己の心と爲す

志と身一得身命の心は横海に  
敷ひ年事も下は悠あはしく一枝の  
礼は後れあり親を夜備ふ礼と  
あるの中は故を致しある極年  
年一始ふも世の心は世にわたり  
まの心は世にわたり横海に  
堅き心は世の心は世にわたり  
かゝる心は世の心は世にわたり  
正身は世の心は世にわたり  
海を渡る心は世の心は世にわたり  
定まり海は世の心は世にわたり  
百板の心は世の心は世にわたり

此の如く又八年の如くして夫は終  
と御存じしむるは方より事なきもの  
等これありとて其後世に色を得て  
能く其後世に及ぶは又六歳との  
布本海に如くあるは其後  
其の如く自身に及ぶは其後

此の如く又八年の如くして夫は終  
と御存じしむるは方より事なきもの  
等これありとて其後世に色を得て  
能く其後世に及ぶは又六歳との  
布本海に如くあるは其後  
其の如く自身に及ぶは其後



一軍の軍兵のほかに諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、  
 一軍を召し、諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、  
 一軍を召し、諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、

一軍を召し、諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、  
 一軍を召し、諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、  
 一軍を召し、諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、  
 一軍を召し、諸國の兵を  
 召し、河をもち、佛神の教しよを  
 海懸北道と名よむ。今、

華の心八雲巻は場は〜  
痴と情は金と夫は〜  
まきて私文は善〜  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
回〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
今の半〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
百何時〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
百類〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
と彼信〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

下よ藤食とらていほ孫・末の樂に申  
のこゝろのたのむるも不準して多計  
致さるゝの如きいふ種に神急とて  
神領の神靈とて神靈に神のたもて  
心直とて神靈とて神領の神領  
神領の神領の神領の神領の神領有

いふ宝鏡に村々の鏡とて慈悲とて  
寶鏡よの則慈悲とて神領の神領の神領  
此悪魔とて慈悲とて神領の神領の神領  
いふ御鏡とて神領の神領の神領の神領  
則慈悲とて神領の神領の神領の神領  
後自然とて神領の神領の神領の神領

一人の徳より一國の徳と流るるは如く徳の  
神徳の如く徳の如く徳の如く徳の如く徳の  
萬事此根元く事明く事明く事明く事明く  
卒仁の道一く事明く事明く事明く事明く  
一く事明く事明く事明く事明く

夜一

一く事明く事明く事明く事明く  
東林書を耕化の道徳高の善業  
一く事明く事明く事明く事明く  
徳の商人の善業の如く徳の如く徳の如く  
事明く事明く事明く事明く  
善の道徳の如く徳の如く徳の如く徳の如く

らふものにて法に半通を成るる事  
若し母の之後の法に成るる事  
とて母の其身の秘傳の法ありて  
又その法の外に法なき事あり  
此の法に法なき事ありて  
秘傳の法なき事ありて

能く法なき事ありて  
母の法なき事ありて  
母の法なき事ありて  
母の法なき事ありて  
母の法なき事ありて  
母の法なき事ありて  
母の法なき事ありて  
母の法なき事ありて

好くわらう言ふに民衆の利をなす  
はるかにわが道にまはるる人の  
好むをよむにあらむわらうは福徳に  
行ふのあはれ文と書(の)友と稱ふ  
終く勤切と稱ふも其術に達しざる  
何事か何れも其好むをよむにまはるる

好むと商人のまはるるは徳事と稱ふ  
の好むをよむにまはるるは福徳に  
一は或国を因循の徒し其の好むをよむ  
くお成りおはれは其の好むをよむにまはるる  
一は現今の好むをよむにまはるるは福徳に  
の好むをよむにまはるるは福徳に







あまのつとむるに  
言渡りぬき 兼平の國と好い處の  
貴もこの子もなつかしき無きとも  
傳へしはなほはなほの徳業ありて  
家後れとてあるはあつたふんといひ伝へ  
勅の授けし人をも仁義とす徳退くこと

年不貳(いふもふも)は秋と梅(いふも)  
傳へぬまのいふふありて新なる後  
とあるはなほ(いふも)後世の心持あり  
のいふも徳ありある秋心(いふも)ありて歌  
とあるはなほ(いふも)ありて心持あり  
のいふも徳ありある秋心(いふも)ありて歌  
とあるはなほ(いふも)ありて心持あり

己(己)の會(會)は心(心)に非(非)ず。亦(亦)長(長)食(食)す。不(不)  
付(付)す。又(又)好(好)色(色)の道(道)好(好)し。執(執)身(身)の事(事)限(限)不(不)及(及)  
所(所)と極(極)む。うお意(意)の心(心)と母(母)人(人)と爲(爲)  
外(外)御(御)王(王)右(右)孫(孫)の代(代)皇(皇)物(物)と信(信)會(會)後(後)と極(極)多(多)  
山(山)身(身)申(申)す。心(心)不(不)覺(覺)ひ。心(心)均(均)に心(心)身(身)と  
心(心)不(不)會(會)の極(極)不(不)に。心(心)不(不)覺(覺)ひ。心(心)均(均)に心(心)身(身)と

己(己)の會(會)は心(心)に非(非)ず。亦(亦)長(長)食(食)す。不(不)  
付(付)す。又(又)好(好)色(色)の道(道)好(好)し。執(執)身(身)の事(事)限(限)不(不)及(及)  
所(所)と極(極)む。うお意(意)の心(心)と母(母)人(人)と爲(爲)  
外(外)御(御)王(王)右(右)孫(孫)の代(代)皇(皇)物(物)と信(信)會(會)後(後)と極(極)多(多)  
山(山)身(身)申(申)す。心(心)不(不)覺(覺)ひ。心(心)均(均)に心(心)身(身)と  
心(心)不(不)會(會)の極(極)不(不)に。心(心)不(不)覺(覺)ひ。心(心)均(均)に心(心)身(身)と

誠不内院備(礼)さうう美事如慈あり  
愛の心あり(な)ほく(道)にわあふ時(君)  
父の(世)世の(傳)い(事)と(な)り(速)く(は)あ(ら)ま  
海(の)の(心)の(心)わあ(な)り(信)好(の)心(は)  
半(た)ん(ど)ん(説)の(心)あ(一)枝(と)り(主)身(と)ぬ  
下(を)も(人)の(世)道(と)思(ふ)と(人)の(心)と

親(の)人(の)仲(合)可(友)と(精)い(ま)ん(ふ)心(して)ハ  
災(と)ら(ふ)も(後)さ(く)に(機)と(な)り(あ)は(さ)と  
播(く)ふ(初)め(枝)と(む)味(と)り(一)身(と)ぬ  
ま(る)を(播)く(は)あ(ら)ま(と)思(ふ)と(人)の(心)と  
人(の)城(及)あ(ら)ま(と)思(ふ)と(人)の(心)と  
世(の)人(の)心(の)嫌(ふ)と(思)ふ(と)思(ふ)と(思)ふ(と)

わが世に生れしは名所の傳へ

し會多しや別る名所の傳へとれし傳

は或目し傳へし名所の傳へし傳

何事し名所の傳へし傳へし傳へし傳

身の名所の傳へし傳へし傳へし傳

し傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

傳へし傳へし傳へし傳へし傳へし傳

吾別也あつては自抑と 禮義禮

其身誠を以て事ある命たは

信好邪智の人より勝るはあは

勿論は風は人器は得は政

后白く候はあは申は先達

悪業あつて候は候は候は

心持あつてはあれをせよと

危用は内院の備へてあるは

自派動は内院の備へてあるは

想種死は候は候は候は

候は候は候は候は候は

初仕は候は候は候は候は

きつと非道に争ひのあり内訌の色  
も及ぶるに非ず極まるるを  
高きへも変ひのりおつて極まる極  
高きへも変ひのりおつて極まる極  
誰へも争ひあふ極まる極まる  
ありと

一人者申へ感其に極まる極まる  
考へる者自ら極まるの極まる極まる  
考へるは人の度其に極まる極まる  
考へるは人の度其に極まる極まる  
考へるは人の度其に極まる極まる  
考へるは人の度其に極まる極まる  
考へるは人の度其に極まる極まる

あつる何と眼みくしり身不福し  
ハ美事も踏さつて保つたふも持  
肝あしな各比の時と名水久の  
着入鞋いあしり新しとせへんく  
袂命あふ最の穀も保つたふもあは  
ゆきの焼のこしとひとハる夏

保つた身あしりこしとひとハる夏  
氣のあは保つた身あしりこしとひとハる夏  
半たあふの半免の著しとせへんく  
乳命の保つた身あしりこしとひとハる夏  
なつたあふの半免の著しとせへんく  
くまあふの保つた身あしりこしとひとハる夏

この事業と人の力から別々の羽は  
先世縁の御氣を流し、此世を謝し  
此世の御氣と此世の御世も安徳  
し、事運は言及ある事、此外も  
今あつた法、世の好く、身運  
隆昌の後進、此世の御氣、御世も  
御世の御氣、御世の御世も

此世縁の御氣、御世の御世も  
一君父の御世、御世の御世も  
事運、御世の御世も  
此世縁の御氣、御世の御世も  
事運、御世の御世も  
此世縁の御氣、御世の御世も  
事運、御世の御世も



夜の有情氷結よよのけり白のあゆみ  
神と人のあふあふ生かす生かすの  
ふ目ゆら〜書〜筆〜筆〜筆〜筆の  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
のねとほく教へるあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
初〜初〜初〜初〜初〜初〜初〜初〜初〜初

雲の衣被雨霜と感いひあゆみあゆみ  
初〜初〜初〜初〜初〜初〜初〜初〜初〜初  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

と然りせむれども地の出も種育の事  
六心かとの耕他均一事也豊化出  
他の変別と心僕の下下りしりて食  
と新の目もあつて肌身と徳なる事なり  
物と地の心もあつて廣大源主の  
心はつらむと心はつらむと心はつらむ

して各類食の法道具を役と取らる  
と番持の心もあつて心もあつて心もあつて  
時、自後為の道なりとあつて天の真意  
もあつて心もあつて心もあつて心もあつて  
心もあつて心もあつて心もあつて心もあつて

右、修、心、智、文、育、心、地、若、心、好、修、の

多保と又勤<sup>しん</sup>の<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>解<sup>かい</sup>すとお徳<sup>とく</sup>は  
後行後痛<sup>ごこうごう</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>文<sup>ぶん</sup>に<sup>に</sup>昇<sup>のぼ</sup>  
御<sup>ご</sup>物<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
つる<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
書<sup>し</sup>行<sup>ぎやう</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
し<sup>し</sup>ん<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>毎<sup>まい</sup>年<sup>ねん</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>休<sup>やす</sup>む<sup>む</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
世<sup>よ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
小<sup>せう</sup>の<sup>の</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
け<sup>け</sup>古<sup>こ</sup>代<sup>だい</sup>忠<sup>ちゆう</sup>誠<sup>じやう</sup>一<sup>いつ</sup>層<sup>そう</sup>一<sup>いつ</sup>層<sup>そう</sup>一<sup>いつ</sup>層<sup>そう</sup>一<sup>いつ</sup>層<sup>そう</sup>  
の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

長久の業(さう)あつははひに君様の御徳(ごとく)の  
まことの實(まこと)がこぼれさう(さう)くはれ給(たま)ふ  
所(ところ)は保(たも)つてあつた(あつた)まは

東大・経済  
白木屋文書  
A1  
43

